



Shinjuku Mini Museum

新宿ミニ博物館

新宿区指定文化財

三十中歌舞伎
山陰

須賀神社

電話 住所 新宿区須賀町5番地
03(3335)1-7023

四谷の総鎮守「須賀神社」と三十六歌仙絵

■ 三十六歌仙絵の概説

[三十六歌仙絵…新宿区指定有形文化財 絵画]

三十六歌仙絵は、平安時代中期の公卿藤原公任（ふじわらのきんとう）(966~1041)が、過去および同時代の優れた歌人三十六名を選定したもので、万葉歌人から柿本人麿・山部赤人・大伴家持の三名、平安時代前期の『古今集』『後撰集』頃の歌人から紀貫之・在原業平・小野小町ら三十三名が選ばれています。

三十六歌仙絵は、それぞれの歌人の肖像画に代表作一首を書きそえたもので、平安時代後期に出現した似絵（にせえ）という肖像画の影響をうけ、鎌倉時代初頭に成立し、江戸時代まで盛んに描かれました。

須賀神社の三十六歌仙絵は、三十六歌仙を一人一枚の絵に仕立てたものです。縦55cm・横37cmの絹地に彩色したもので、現在は額装され社殿内に掲げられています。

当時、画家として高名だった四谷大番町（大京町）に住む旗本大岡雲峰（1764~1848）の絵と、和歌や書画で人気を博した公卿千種有功（ちぐさありこと）（1797~1854）の書により、天保7年（1836）に完成・奉納されたもので、四谷の総鎮守として信仰をあつめた須賀神社の隆盛を物語る文化財の一つです。

■ 鎔 絵

明治維新以降多くの西洋建築が造られるようになりました。この西洋建築を実際に施工したのは、日本の大工や左官たちでした。左官職人は、壁を塗ることを本業としていましたが、その技術は当時世界一とまで賞されていました。彼らの技術面の優秀さを端的に示しているのが漆喰で造られた「鏽絵」です。ここにある「鏽絵」は大鳥神社土戸の一部で、後に四谷の須賀神社に奉納されたものです。作者の四谷の左官「吉田亀五郎」は、名工とうたわれた伊豆の長八の弟子にあたります。

■ 須賀神社の由来

[須賀神社について]

四谷の産土神（うぶすながみ）で、祭神は建速須佐能男命（たけはやすのみこと）と宇迦能御魂命（うかのみたまのみこと）の二柱です。

かつては、牛頭天王社（ごずてんのうしゃ）と稻荷社の二つの神社であったもので、江戸時代は稻荷天王合社と呼ばれ、明治にはいり須賀神社と改められました。

稻荷天王合社のうち稻荷社の由来については、次の二説が伝えられています。

一つは、かつては麹町十一丁目清水谷にあり、一つ木村の鎮守であったものが、同村にあった別当宝蔵院（神仏習合の時代、神社には別当寺があり、その僧侶が社僧として神社の儀式に携わりました）が、寛永11年（1634）に現在の須賀神社の場所に移ったのを機に、稻荷も移転してきたというものです。

もう一つは、稻荷社は、現在の勝興寺（須賀町八番地）境内にあった椎の大木の根元に祀られており、宝蔵院が清水谷にある頃から稻荷社まで注連縄飾りの奉仕に来ていたため、寛永11年（1634）に勝興寺が移転してきた時、相談のうえ宝蔵院（現在の須賀神社）に遷座したという説です。

牛頭天王社のほうは、寛永18年（1641）に、神田明神境内の牛頭天王社を四谷のお仮屋横町付近に小祀を建て祀ったものだそうです。

ところがこの牛頭天王社に参詣人が多かったため、寛永21年（1644）寺社奉行に願い出て、同年6月18日に宝蔵院境内の稻荷社と合祀し、現在の稻荷天王合社となったものです。

以来、稻荷は鮫河橋・権田原の、天王は四谷の鎮守として崇敬され、現在は四谷地区十八町会が氏子町となっています。

藤原敏行（ふじわらのとしゆき）
あさはぎの

花さきにけり高砂の

をのへのしかは

今やなくらん

（古今集・卷四）



源 重之（みなもとのしげゆき）
なつかり（初雁）の
たまえのあしをふみしだき

むれゐるとりの

たつそらそなき

（後拾遺集・卷三）



源 宗于（みなもとのむねゆき）
山里は
冬ぞさびしさまさりける

人目も草も

かれぬと思へば

（古今集・卷六）



源 信明（みなもとのさねあきら）
ほのほのと
有明の月の影に
始とけふをいのりおきて

今行末は
神ぞしるらん

（新古今集・卷六）



藤原朝忠（ふじわらのあさただ）
よろづ世の
ちひろのはまにひろふとも

今は何てふ

かひがあるべき

（拾遺集・卷五）



藤原敦忠（ふじわらのあつただ）
いせの海
ちひろのはまにひろふとも

かへる山ちに

（後撰集・卷十二）



藤原兼輔（ふじわらのかねすけ）
みじか夜の
ふけゆくままに高砂の

峰の松風
ふくかとぞきく

（後撰集・卷四）

藤原高光（ふじわらのたかみつ）
春すきて
ちりはてにけり梅の花

ただかばかりぞ

（拾遺集・卷十六）

源 公忠（みなもとのきんただ）
とのもりの
とものみやつこ心あらば

この春ばかり

あさぎよめすな

（拾遺集・卷十六）

壬生忠岑（みぶのただみね）
はるたつと
いふばかりにや三吉野の

山もかすみて
けさは見ゆらん

（拾遺集・卷一）

齋宮女御（さいぐうのによ）
袖にさへ
秋のゆふべはしられけり

きえしあさぢが

露をかけつ

（新古今集・卷八）

大中臣頼基（おおなかみのよりも）
子日する
野べに小松をひきつれて

かへる山ちに
鶯ぞなく

（玉葉・卷一）



小大君（こだいのきみ）

大井河

そま山かぜのさむけきに

岩うつ波を

雪がとぞみる

（新拾遺集・卷六）



藤原仲文（ふじわらのなかふみ）

おもひしる

人にみせばやよもすがら

わがとこなつに

おきゐたるつゆ

（仲文集）



大中臣能宣（おおなかみのよしのぶ）

みかさもり

ゑじのたくひのよるはもえ

ひるはきえつづ

ものをこそおもへ

（詞花集・卷十一）



壬生忠見（みぶのただみ）

こひすてふ

わが名はまだき立ちにけり

人しつすこそ

思ひそめしか

（拾遺集・卷二十）



平兼盛（たいらのかねもり）

しのぶれど

色にいでにけりわが恋は

物や思ふと

人のとふまで

（拾遺集・卷十二）



中務（なかつかさ）

秋風の

吹くにつけてもどほぬかな

萩の葉ならば

音はしてまし

（後撰集・卷十二）



藤原清正（ふじわらのきよただ）

天つ風

ふけひの浦にあるたづの
などか雲居に
かへらざるべき

（新古今集・卷十八）

源順（みなもとのしたがう）

水のおもに

てる月浪をかぞふれば
こよひぞ秋の
もなかなりけり

（拾遺集・卷三）

藤原興風（ふじわらのおきかぜ）

契りけむ

心ぞつらきたなばたの
年にひとたび
あふはあふかは

（古今集・卷四）

清原元輔（きよはらのもとすけ）

契りきな

かたみに袖をしほりつつ
す名のまつ山
なみこさじとは

（後拾遺集・卷十四）

坂上是則（さかのうえのこれのり）

みよしのの

山の白雪つもるらし
ふるさとさむく
なりまさるなり

（古今集・卷六）

藤原元真（ふじわらのもとざね）

咲きにけり

わがやま里のうの花は
かきねにきえぬ
雪と見るまで

（元真集）



在原業平（ありわらのなりひら）
月やあらぬ

春やむかしの春ならぬ
わが身ひとつは

との身にして

（古今集・卷十五）



古今集・卷九)



僧正遍照（そうじょうへんじょう）
いその神
ふるの山べの桜花
うゑけむ時を
しる人ぞなき
（後撰集・卷二）



古今集・卷九)



素性法師（そせいほうし）
音にのみ
菊の白露夜はおきて
昼は思ひに
あへずけぬべし
（古今集・卷十一）



古今集・卷十一)



紀 友則（きのとものり）
紀友則
夕されば
螢よりけにもゆれども
ひかり見ねばや
人のつれなき
（古今集・卷十二）



古今集・卷十二)



猿丸太夫（さるまるだゆう）
奥山に
もみぢふみわけ鳴く鹿の
声聞く時ぞ
秋はかなしき
（古今集・卷十四）



新古今集・卷一)



小野小町（おののこまち）
わびぬれば
身を浮草の根を絶えて
誘ふ水あらば
いなむとぞ思ふ
（古今集・卷十八）



万葉集・卷六)



〈スタンプ〉

須賀神社案内

- JR中央線「四ツ谷駅」から徒歩12分
- 東京メトロ南北線「四ツ谷駅」から徒歩12分
- 東京メトロ丸ノ内線「四ツ谷駅」から徒歩12分
- 東京メトロ丸ノ内線「四谷三丁目駅」から徒歩7分
- JR総武線「信濃町駅」から徒歩10分
- 都バス「左門町」から徒歩5分
- 都バス「四谷二丁目」から徒歩7分

